

「いま、子供たちは！？」

～見えない心に気付くとき～

教育センター教育相談部

133号 中学校の事例

134号 小学校の事例

135号 高等学校の事例

*登場する人物は、すべて仮名です。

1 進路指導室にて

「今日も一件もなしか……」

夏休みも終わろうとしていたある日、進路指導部長の山本先生は去年の半分にも満たない求人票を見つめながら、昨日と同じため息をついていました。

山本先生の勤務する学校は、7割以上の生徒が就職を希望する普通高校です。昨今の社会情勢を考えれば、今年の求人が非常に厳しいものになるだろうということは、去年から予想されたことではありました。しかし、現実には山本先生の予想をはるかに超えていました。

「定年の年にこの状態とは……」

山本先生は深いため息をつきながらソファに腰を下ろしました。そこへ3年6組の坂本君が入ってきました。

坂本君：失礼しまーす。先生、今日は？

山本先生：残念でした。

坂本君：えー！まだ来てないのお！？

山本先生：だから前から言ってるだろう。今年は難しいぞって。県外分を合わせたってこれしか来てないんだ。お前が車の整備をやりたいって気持ちはわかるが、現実はこちらだからな。上田先生とも話したんだが、もう少し職種を広げて考

えてみたらどうだ？

坂本君：嫌ですよ。俺、ぜったい整備がやりた
いんです。

山本先生：そうは言っても求人が来なければどう
しようもないだろう。

坂本君：……先生、俺待ちます。求人票来るま
で。

山本先生：待つのも一つの手段だが、もしこのま
ま求人が来なかったらどうするんだ？

坂本君：……。



坂本君は、成績も生活態度もそれほど良いと言
えるような生徒ではありませんでした。現に
1年生の時に一度、2年生の時にも一度万引き
で謹慎指導を受けたことがありました。それで
も進路については1年生の時から「整備士にな
る」という目標を持ち続けており、担任の上田
先生にもそのことは伝えていました。しかし上
田先生は「頑張り」「もっと勉強しろ」と励ま
してはくれましたが、「一緒に考えてくれる」
ということはあまりありませんでした。そんな
上田先生を、坂本君はどことなく物足りなく感